

神楽、虫祭、宵宮、お盆^{ウツ}其の他の祭礼や祝いごとにも頼まれて踊り獅子舞大会も度々あった。

娯楽に乏しかった昔の農村では獅子踊りを見るのが唯一の楽しみであった。衣類に乏しかった昔は古い着物をほどこき、洗い張りして天気の良い日は張り板を立てて、糊をつけ布地を干したのが良く見かけたものだ。八〜十尺程の一枚板に脚を付けた物で糊に付けた布地を貼るのである。洗い張りが済むと「ジヨバ打ち」をする。固く糊づけした布地を「ジヨバ」に乗せて「ジヨバ槌」で打つ。月夜の晩に前庭で娘達が「ジヨバ打ち」をする音が遠くから聞えてくるが、若者達は音に誘われ集ってきて「ジヨバ打ち」を手伝うが、若者達は娘等をからかうのが目的だった。この頃は冬に備えての馬糧の干草刈りに忙しく、秋の内に乾燥させ、家に運ぶのも女が手伝う仕事だったから大抵は「ジヨバ打ち」は夜の作業だった。

明治から昭和初期迄は男はワラジ、女はアシタカを穿き、ボドを着て手甲と脚絆を付け仕事をした。嘉瀬では刈取った稲は全部島立乾燥であった。約二週間位島立を置き其れから稲乳穂を一週間〜十日位積んで、乾燥させ、稲藁が乾くと人の背や馬の背で家まで運び稲こきをはじめ。脱穀機が無かった時代は「センコキ」で脱穀した。其のあと籾押し棒で叩き、籾と屑とを分離し、籾通しで籾と藁屑と分け、さらに唐箕に掛けて「シダ」と埃を飛ばした。唐箕が無かった時代は箕でいちいち煽^フったと言う。こうして六斗入れの籾俵に詰めるが寒い時節なので手や足などに大きな「ヒビ」が切れ、手には「マメ」が沢山出来た。埃が立ちるので目も鼻も口も埃だらけ、この籾を摺臼（スルス）にかける。摺臼は縄を付けて引くが手木を付け、押したり引いたりして籾を摺る。籾の乾燥が悪いとクダケ米が出る。こうして玄米にしてから米搗きをして白米にし

商家では農家の人々に通帳^{カゴ}で商品を売ったりしたので一年分の勘定の月でもあった。

十二日は山の神で、山に關係のある人々は仕事を休み仕事に使った道具は一日中休ませ、山の神の掛軸を飾り十二日につなぐんで十二個の鏡餅や生魚、お神酒を供え、神棚には「シトギ」を供えて酒を飲んで一日中休んだ。冬至は一年中で昼が一番短く、夜が一番長い日だ。

昔から「かぼちゃ」を食べると中風に罹らないとされ、今でも、冬至に「かぼちゃ」を食べる風習がある。冬至が過ぎると愈々正月だが農家はこうして難渋と苦楽で一年を過ごし、又、新しい年を迎えるが、生きる為には必至で頑張り抜き、それを繰り返してきたのである。

尚、この稿を綴るに当り老人クラブの皆様御協力を得た事を心より感謝申し上げます。

運動会

木立久二

昭和も一ケタ時代の嘉瀬小学校春季運動会は旧曆四月八日に開催される習わしであった。年によっては金木の観桜会の期間とかちあい肌寒い日でもあった。

そんなある年の運動会の、ある親子の会話を綴ってみたい。子供達にとっては運動会のうちでもっとも楽しい昼飯の時間帯になってきた。子供は父の腰にまわりつきながら、子「アヤ 早く目ン玉食うべし」父「もう少しマジナガ。いま昼休みになるはで」

たが其の後米搗きは水車が出来利用したと言う。

センコキ時代には稲刈も結束も素手でやるので両手の指はヒビ、アカギレだらけで傷口からは血を吹き、其の傷口に飯を練り「ソコデ」を貼る。見るも無残な有り様で今では想像もつかない難儀だった。夜なべ仕事は火の気の無い「ニラ」作業場」でした。アマ石を掘って穴をあけ「松脂」に火をつけ明かりにし、冬は囲炉裏の火明かりで仕事をした。行灯やカンテラは菜種油か魚油を使い、それも女達が針仕事やコギン刺しの時だけだったという。

難渋した稲作業が終り、一段落した農家では稲作業が終ると新しい「餅米」で「マワシ餅」を搗く習わしがあり、神仏に供えてから地主や村の主立、親類、知己などに回して歩く習慣があった。まわし餅を兼ね嫁を実家に遊びにやった。秋のまわし餅は主に子供達の使いで、子供達は駄賃を貰うのが楽しみだった。

旧十月五日から十五日の間に嘉瀬のお寺（妙光堂）では十夜が行われ檀家の婆様達は赤飯を炊き、お寺に赤飯やお菓子などを持参して庵主のお経を聞きながら、お逮夜をしたが今では十夜の日一日だけとなった。十五夜が過ぎると寒い秋が足早にやって来て、日中でも火が恋しく朝は霜が一面に見える。天気の良い日を選んで野菜の収穫をし井戸端や川、溜池で野菜を洗う女達の姿が見える。長い長い冬籠りの暮らしなので、何処の家でも四斗樽や大きい桶に沢庵漬、千本漬、タカナ、ダイナ、蕪、白菜などを漬ける。寒さが厳しくなると樽の上に氷が張り、氷が付いたのを食べるのも格別な味がする。昔の家は貧弱なので農家では家の周囲を雪囲いする。冬の間雪の吹溜りで往来が出来なくなるからだ。

十二月は小作人達は地主に年貢米^{クダケ}を持って行くが、地主の家では年貢米を持って行った小作人に酒を振舞って接待する。

子「アヤ ワ早く食てじゃ」

父「もワンチカ マジナガテ」

そうこうしているうちに昼休みの鐘が、ガラン、ガランと鳴り響き学童達はワアッと親が陣取っている場所に向けよって普段は食べることのない卵の空煮や、巻寿し等たらふく食べることができた。

ところでくだんの親子の席では

子「アヤ この目ン玉 めいナア」

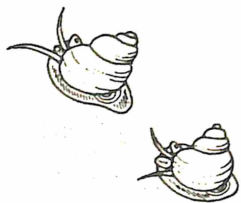
父「おげ しゃべねで うってかなが」

こうして子供は握り飯しをほおばりながら、父はにがり酒をチビリ、チビリとやりながら、目ン玉を酒のおかずに入れていた。

ところで目ン玉はツブ（たにし）の料理のことで、貧しい家庭の最高の、そして晴れの日の食糧であったのだ。おそらく母親は産月のため運動会にこられなかったのだろう。

その子も今健在であれば還暦を過ぎて五つ六つであろう。ちなみに当時の湿田の田ンボにはツブはいっぱい棲息していた。

○ 昭和五十年代に入って業者が企業として人を雇い田螺^{ウツ}の採集に乗り出し、津軽の溜池等から一時姿を消したが、今また繁殖して昔ほどでもないが、たにしの群棲が見られるようになったのは田舎の自然の形として好ましく感じられる。



嘉瀬の古木「イタヤ」

山中長三郎



嘉瀬の老木「イタヤ」

嘉瀬の昭和町と車町の境界線大堰川は、北から南に流れている。その大堰川のほとり昭和町山中俊治宅地内に、高くそびえる「イタヤ」がある。樹齢四百年といわれる古木で、高さ二十五メートル、周囲三メートルほどある。

四百年前といえ、一五九〇年（天正十五年）頃であり、嘉瀬開村の時期である。樹齢については、詳細に調査の必要あるとしても、古い物が失われる今日、嘉瀬の歴史を知る上にもこの名木を大切に残して置きたいものである。

イタヤは、カエデ科で、蛙手（かえるで）の略で、葉の形からこの名がきた。紅葉（もみじ）する木の大部分がカエデ類なので、モミジと呼んで、カエデをさすようになった。

このことは、万葉集の

吾が屋戸に 黄変（もみず） 鶏冠木（かえるで） 見ることに
妹を懸けつつ恋ひぬ日は無し （巻八、一六二三）

日本人は、紅葉の美自然の風景に見るばかりでなく、庭園植物としても重んじている。日本の築庭の法則では全庭の西方に紅葉樹木を植え夕陽木として夕日に映える紅葉を鑑賞するのである。

川は流れぬ

山中正津

「ムカシ、ムカシある所に、お爺さんとお婆さんが居りました。お爺さんは山へ柴刈りに、お婆さんは川へ洗濯に行きました。お婆さんが川で洗濯をしていると、川上から大きなモモがドンブラコ、ドンブラコと流れてきました。」

「ご存じ昔話の桃太郎のお話です。ムカシ、ムカシから川は流れていたのです。」

「スサノ才尊は、斐伊川を逆上がって行くと、……」

神代の時代から川は流れていました。川は、地域の住民にいろいろな恵みを与え、時には暴れて人々を困らせました。

川は地球上に無くてはならない存在であり、過去を語り、また未来を夢みる時にも常に悠々と流れているのです。

川の想い出その一

昭和十五年の春、高等小学校を出て村の郵便局に勤めました。娯楽の乏しい田舎では、町へ映画でも見に行けばハイカラな時代です。土曜日の午後、郵便局長の二男坊で、五所川原農学校の生徒であった武美さん（故人）がガキ大将となり、二・三人の手下（その中の一人が私）を引

き連れて雑魚採りに行ったのが、嘉瀬と金木の間の川コ、一間堰でした。その時始めて一間堰という名称を知り、嘉瀬と金木はこの堰を境界線にしているということを知りました。

嘉瀬と金木をつなぐ道路を カラザケ（川境）といっている理由も、後でわかりました。

その時の収穫は、全員が泥まみれになってバケツ二杯のナマズや鮒、赤い腹をしたイモリ（黒焼きにすれば惚れ薬になると云われていた）、蟹なども入っていたことを懐かしく思い出します。

私は蟹を五・六匹とナマズを二匹分け前に貰いました。気味の悪い赤い腹のイモリは、誰も貰い手はありませんでした。

川の想い出その二

私が小学生の頃、五年生か六年生の頃（昭和十一年か十二年）だったと思います。その頃川蟹釣りが大流行で、先ず蟹を釣るための蟹網を編むことから始めます。

凧揚げ用に使う綿糸を竹で作った編み針で木羽根を一寸（三センチ）ほどの巾にしたのを定規にして器用に編んでゆくのです。直経四十五セ

ンチぐらいの輪を作り、編んだ網をその輪にかけて、蟹網を作るのです。網糸よりも少し太い糸で輪をバランスよく釣り下げ、六尺（一八〇センチ）ぐらいの長さの棒（柴木）の先端に結びつけます。

蟹釣網は、全部子供たちの手作りで、器用、不器用さはあるものの、自分で作った財産であり、その枚数を多く持つのがまた自慢のタネでもありました。

漁場についても、テリトリ（縄張り）を主張し、良い場所を確保するため、川淵の柳柴を押し分け、足場のよい所を探すのも大苦勞でした。

古町のシノグチ（樋の口）の小田川に架かってある木橋の上から長い糸を下げて蟹網を仕掛けるのも、好漁場の一つでしたが、古町の子供たち、時には大人も権利を持っていて私たちの立入るスキはなかったので、遠い大川（旧十川、別名尻無川とも称す。）まで行って漁場を探すよりなかった。

学校の休み時間などにせつせと網を編み、何日もかかって編み溜めたのを針金で作った輪にかけて、十枚位も出来れば、いよいよ出陣です。溜池や田堰からツブ（田にし）を拾ってきてエサにします。網は夕方仕掛けて、朝に揚げに行くという方法もあるが、それでは、他のひとに先に揚げられる心配もありますし、また朝寝坊の者には、一・五料の距離があれば、自転車も今ほど普及していない時代ではとても登校前にちよっとひとはしりというわけにはゆかない。

日曜日に、朝からニギリ飯を持って、蟹釣網を背負い、柴のサオをたばねて肩に担ぎ、二本の足を頼りにテクテク大川に向かって歩きます。

大川の河川敷は堤防から水際まで数十米あり、飯詰川との合流点から小田川との合流地点までは数十町歩の広大な面積で、春にはアサドキ（ア柳柴の枝集めをし、夏には唇を紫に染めて喰べた。「とづら（クマヤナギ）」のつるを縄の代りに使って縛るのである。大体の時間を見計らって蟹網の引き揚げにかかる。足場が悪く、水中から上げる網は以外に重い。慎重に竿（さき）を上げると丸い輪の網に足を引っかけた蟹が一度に二匹も入っていることもある。網がわずかに水面に顔を出し、中に蟹が蠢（蠢）いている時の手応えはやめられない。しかし、どうみても空網の時が多い。三分の一にかかっていけば大漁だ。バケツに入れた蟹はガサガサ音を立てている。

二く三回も竿揚げをすれば大分おたる（疲れる）。空腹にもなる。大きなニギリ飯に身欠ニシンに生味噌をつけて昼飯だ。堤防の犬走りの空地に畑を作っている人もある。

畑にはニンジン、ゴボウやキミなども植えられており、取り残しのキミ（とおもろこし）をとってきて焼いて喰べたこともある。漁の収穫の多い時は帰りの荷物も重くないが、少ない時は、竿をかつぐとぐつと肩にくいいるようで村に着くまでに何度も休む。

蟹は雌蟹はおいしい。雌蟹、雄蟹は腹の形で見分けする。家へ持ち帰ってからの蟹の料理は、何と言っても蟹汁である。いい塩梅（あんばい）ガニ（蟹）あんばい」と云われる程お美味しいのである。川蟹は特に味が好いと私は思っている。

私にとって川の想い出では、蟹釣りのことを外すことができない。

川の想い出その三

大人になってからの川の想い出は、洪水で川の堤防に取り残された事である。

サツキ）が群生していた。

アサドキと云えば、やはり小学生の頃に大川の河原も小田川との合流点近くに、土鍋と味噌をコダシに入れ背負い、大末場の田堰からツブ（田にし）を拾いダシにしてアサドキ鍋を、大きなにぎりめしをほぼぼりながらつついたのも今は子供の頃の想い出の一ページである。川を間に対岸の河原にアサドキ掘りに来ている他町村（おそらく蒔田部落）の子供たちと口喧嘩をする。間に川があるからどんな悪たれ口を叩いても、直接の暴力には至らないからどんなに腕力の弱い者でも、口達者であれば優位に立てる。口下手な者は、くやしまぎれに小石を拾って対岸目がけて投げつける。

アサドキは、子供の遊びの産物だけではない。季節の食卓に上り、家計の一助にもなるのだ。その頃の子供たちは、小遣い銭は通常貰うことが無い。正月のマツコ（お年玉）が現金を手にする唯一の時だ。金のかからない遊び、遊びながら家族のためになることをしているのだ。

さて、蟹釣りに話は戻るが、堤防は所々に樋門があって、雲雀野、中菟、三本柳、大末場の樋門から旧十川に排水されていた。

私と従弟は雲雀野、樋門近くの堤防から駆けおりて、大川の川端に歩を進めた。水際には柳柴が生えていて、網を下ろす漁場を探し、十五ヶ所か二十ヶ所位に、丸い蟹網の真中にツブ（田にし）を吊して川の中に投入した。

網を下ろしてから三十分位は時間を置かなければならないので、その間、時間つぶしも兼ねて、休憩する小屋を作る。川端の柳の枝を切り取って集めて、中に二く三人が休めるスペースの小屋を作るのである。ゆるやかに流れる水面に、時々ジャボンと鯉のはねる音を聞きながら

昭和三十三年の集中豪雨で、岩木川も金木川、小田川、飯詰川、旧十川も氾濫した。

春先で各河川には雪解け水が加わり、改修の遅れている各河川の堤防は、どこが欠壊してもおかしくない状態であった。

私は土地改良区に勤めていたので、駒留排水機場の状況を見るため、午後になってから、自転車で中道の道路を旧十川堤防下の揚排水機場に急いだ。

機場には、運転士の須崎梅太郎（故人）さんと秋元金五郎さんがいた。各樋門は逆水門になっているので、旧十川の水高（みずたか）が上がれば扉は自動的に閉まるようになっていた。近くの雲雀野の樋門を見に行ったら三十分位ほど前に扉が閉じ、またそれに伴って内水もどんどん増水してきた。

堤防下を走る承水路は既に満水で、田圃の方まで広がってきた。須崎さんと秋元さんは排水ポンプを動かしたら良いか、どうかを相談している。まだ田打ち前だし内田の氾濫状態を見てからということ、もう少し様子を見ることにした。機場内の休憩室で三人で、この水に乗って魚が来るだろうな、など話しているうちに、小便に外に出た秋元さんは、「大変だ、尻無川（旧十川）が逆流してきたぞ！」と大声で叫んでいる。

雨は止んでいたが、どんよりと曇った日で、須崎さんと私は外へ出てみると、ヒタヒタと音がして、時々ザーと白波が逆巻く。

旧十川は濁流が堤防上まで二尺（60cm）位まで迫っている。ヒタヒタと堤防の縁を叩くのは、岩木川からの水が旧十川に逆流してきているのだ。気がついてみたら中道の道路も三百米程水浸しで、もう自転車も人も通れない状況だ。秋元さんは、「今夜は泊まりだなあ。」と云った。須崎さんは仲間が出来て気強くなったのか、「みんな泊まれ。朝になれば

水が引く。」と云った。機場の中に入ってラジオを聞いた。目屋のダムも放流されたというし、岩木川の神原付近の最高水位になるのは夜中だろうと推定された。岩木川の水位が高くなれば、旧十川への逆水が更に高くなる。堤防を越すようになれば欠壊も予想される。飯詰川左岸には水防団の人たちが土俵を積んでいるのが遠望される。長富を回って帰る事も出来ない。私も泊まる覚悟をした。

須崎さんは炊事の仕度をした。外は薄暗くなった。私は堤防に上り、水嵩をみた。遠くからゴーツという音がして水際はやはりヒタヒタと岸を叩いている。手をのばせば水に届く。一尺ほど水位が上がった。堤防が切れないだろうか、と不安になる。旧十川の川幅がこんなに広がったのは見た事がない。

中へ入って食事をしたが、味はわからない。食事後三人で暫く雑談をしたが、時折ゴーツと聞いてくる音が耳について離れない。

須崎さんは、「すこし横になったら」と云って毛布を出してきたが、とても眠れるものではない。十一時過ぎ懐中電灯をつけて堤防に上がって見た。カヤをさして印をつけて置いたところを見たら、一時間ほど前に見た時と同じだ。逆水は止まった。懐中電灯で水面を照らしたが、丸い輪が水面に映っただけで水の動きはサッパリわからない。しかし、ヒタヒタという音は何時か止んでいた。とにかく岩木川の水位が下がったのだろう。ほっとした。急に疲れが出てきた。中に入って「逆水は止ったよ。」という時、二人も「そんだが、よがったなア、それでもまだ油断されねな。」と云った。十二時にまた水位を見た。二〜三寸下がっている。枯枝を川に投げ、電池で照らしてみた。ゆっくり動いた。下流に移動してゆくのを見て、これで助かった、と思った。

休憩室で二時間位仮眠した。須崎さんも秋元さんも火をたいて起きていてくれた。

濁流に囲まれた旧十川の堤防の小屋で一夜を明かした経験は、何時までも忘れられない川の想い出である。

―おわり―

金木の旧正月

太宰 治

「金木の旧正月」については、そんな特殊な記憶もございません。中学校には行って、それから二十年ちかく、金木で旧正月を迎えたことがないので。せわいしい三学期が、はじまっているのです。小学校のころの記憶としては「小正月」のカパカパがあります。

てるてる坊主のような小さな紙人形を持って、よその家へ行き「カパカパにして来してえ」というと、三角の白い飴（カドアメ）をもらえるのです。校長は、やがてこの風習を「乞食（こじき）のまねだから」と言って学童に禁止させました。私は子供心にも、その校長を偉いと思いました。

（月刊東奥昭和15・2月号）

特集愛郷会

ふるさとつれづれ草

元愛郷会会長 木 立 民 五 郎

愛郷会について何か書けと小山内嘉一郎君と秋元惣之進君の注文である。

半世紀を経た会の足跡を振り返るにはあまりにも溟たる記憶である。入会者にはそれぞれの若い日の思い出があり、併し何故愛郷会が誕生したかを想う時、それなりの時代背景があり、嘉瀬独特の強烈な土地の匂いがあった。

昭和十年八月降り続く豪雨で部落の西方二軒を流れる旧十川の堤防二ヶ所と南側を流れる飯詰川の堤防も同じく二ヶ所殆ど同時に欠壊し、北側を走る小田川の堤防も欠壊し、またたくまに部落の西方一面は一大湖水化した。

満々と溢れた水はオシイバ、中泡、雲雀野、竹崎と洪水の濁流となり、耕作農民は為す術もなく茫然と十日以上湛水の洪水の湖面を、運命と諦観してそれをじっと眺望した。

嘉瀬部落は三年に一度、大なり、小なりこの種洪水の水害に悩まされ、米作主体の百姓にはそれがまた貧乏につながる災害地帯としての地理的

なものであった。

せめて水害さえなければという水田条件は、家岸附近の耕地は当時の旦那衆達の所有地であり、整備されていない川岸近くの耕地はすべて貧乏百姓の所有地となっていた。それも大部分は借地耕地であり、自作地はほんの一部分に過ぎなかった。

郷倉ゴウクラが生まれたのも必然の自営手段だった。冷害、水害の凶作に備える百姓の生きる糧は郷倉だけでは役に立たなかったが、それでも生きる望みの星とはなった。郷倉破り事件は明治の終わりごろ起こった青森県では稀れな嘉瀬にあった事件である。先祖の人達はこの事件に連座し、当時の官権に追われ、命の糧、米の確保を敢えてそれをつら抜いたのである。

その郷倉も大正の飢饉が終わって、昭和の初め頃から、空っぽになり、昭和九年の凶作の年などは、蕨の根をこの空っぽの倉庫で叩く音が朝から晩まで続いた。クズ粉を採ったのである。出稼ぎ等のない当時、男は野に山に蕨の根を掘り、女達は根を叩いて粉を採ったのである。

女工、人身売買は日常茶飯事となり、関東震災で亡くなった嘉瀬の出身の女工は十数人に及んだ。

満州事変では村出身の若者が、青森港から銃に白布を巻いて出征したのが眼に浮かぶ。

五・一五事件から二・二六事件の日本改変の歴史の中で嘉瀬村も大きく揺れた。

併し貧乏打開の根本策は何一つの手も打たれなかった。

貧困打開策、それは何としてもこの村から水害を無くすることだった。

歴代の首長は根本的に水と対決する姿勢がなかった。

雨が降れば洪水になるものと観じ、岩木川の逆水、旧十川の氾濫、小田川の堤防欠壊、飯詰川等全く四周水に取り囲まれて耕地を持つ嘉瀬の宿命は開田このかた続いて来たのだった。

それにしても初代村長以来、嘉瀬村には水を考える村長もなく寧ろ水に全く縁故の無い村長が次々と誕生し、日支事変が大東亜戦争という日本滅亡を賭ける戦争が長く続いた。

この間に芽生えたのが若い嘉瀬生まれの青年の集まりが、十人二十人となり、何かしなけりゃならない郷土のかたまりとなり、青年団活動と全く別な団結となり、禁酒をスローガンにしたり、禁煙を誓ったり、若者組とはかけ離れた行動になり、時局を語り、所信を假令一口でも人前で披露する練習など旺んに行った。

火の用心見回りが春先の馬糞かき集め作業これは当時毎戸一頭近くあった部落の農業耕馬が冬期間に道路一ぱいになった村道の清掃事業だった。天理教で稱えるひのきしん、勤労奉仕作業を報酬もない数々の事業を若い人達は黙々と達成していった。

愛郷会、いつもとはなしにその名がピッタリ団結の会に附されて、誰が名付けた会の名前でもなくそれが自然に呼ばれた会の名稱となった。

年一回の総会には村役場の助役も臨席した。

少ない額であったが要求した筈もないのに村の議会は会に補助金を出した。

お菓子だけの総会場だったが夜更けるのも忘れて若い夢の語り合いがあった。

薬工品の先鞭をつけたのも愛郷会であった。

八幡宮の境内に記念樹も植えた。

併し戦争は日益しに緊迫の度を加え、会員は二人去り三人と祖国の前線に赴いた。

山口県萩市にある松下村塾思想に似た足どりが嘉瀬愛郷会でもある。

一人の松陰が存在しなくても、高杉晋作が生まれ、桂小五郎、伊藤博文は次々と育成されて行った。それは一国を支配しなくとも、本州津軽の一角に若い血を燃やし政争に明けくれた嘉瀬村の貧者の一灯となった。

一度この会に入会した者にとっては忘れることの出来ない心の糧であり、若い青春の花でもある。

戦争が終わって日本人すべてが放心し、一切は時の流れに消えていった。

祖国に殉ずることもなく再び滅びの故郷に生きのびた若い人達の胸に半生前の己の姿が何とみるか。

水に悩まされた部落の中をダムの水が滔々と流れ、堤防は川幅広い流れを包んで今やビクともしない、水害よさよなら。

新しい作物と取組む農耕に向かって愛するふるさと創生事業は何と慮えるか。今若い血をたぎらした人達の氏名を左記に掲げ愛郷会思い出の記とする。

沢田薫、小山内嘉一郎、秋元惣之進、土岐輝雄、沢田繁一、外崎好栄、鳴海俊男、山中長三郎、木下俊蔵、(故人平川久工門、鳴海進、浜田常道、山中秀四郎、吉崎光春)

愛郷会と青春と戦争

元愛郷会員 小山内 嘉一郎

元愛郷会員 小山内 嘉一郎

私が小学校の四年生頃、近所の若者達が左右の襟に『嘉瀬青年愛郷会』、背には赤い桜花の中に『誠』と染め抜いた半天を全会員が着て、地域社会の雪道の修理、お正月の神社の除雪、そして秋になれば夜警をしているのを度々見上げたものである。父や母も感心な若者たちだと、ほめていたのを聞いて子供心にも俺だって若者になれば、あのようなことをしようと思ったものであった。

後で聞いた話だが愛郷会の創立は昭和八年四月と知って、私の認識と会っていると思った。やがて私も小学校を卒えて、農作業を手伝いながら青年団に入り、青年学校にも通った。青年学校は俗に夜学と稱して、夜に小学校の体操場で、主として軍事教練を行い、学科は二の次とされた。青年学校で長髪を禁じられたので、それが嫌で夜学を敬遠する人も少なくなかった。

さて私に愛郷会の入会を奨めたのは、今清作さんであった。今さんは現在喜良市の方ですが、元は古町で旧姓は平川さん、当時嘉瀬の産業組合に勤める傍、青年団体の活動をして地域の良きリーダーでもあった。

時は昭和十五年八月二十日の夜、愛郷会の集会有りというので、会場である小学校に新加入者となる友だち五人と出かけた、会場には先輩

会友三十人程集まっていた。開会してすぐ新入会の自己紹介と『愛郷会で懸命に頑張ります、今後よろしくお願いします』と宣誓して正会員に認められた。

その後は木立民五郎会長より約一時間、村政の話から国内、そして国際問題まで解り易くお話をしてくれた。その頃私の家では新聞も購読してないし、ラジオもなかったもので、急にもの知りになったような気がした。愛郷会では毎月の一日と十五日の晩に例会を開催した、会場は小学校か役場であった。半月に一度時事問題など詳しく聞けるのは楽しかったけれども反面、心配ごと一つ増えた。それは会長のお話の後、出席会員が必ず意見発表をすることになっていた。最後は愛郷会の会歌を斉唱して閉会である。会歌の歌詞は木立会長であり、作曲は音楽家の外崎三千男先生である。なおその歌詞は元会員である沢田薫さんが書くとのことだから省略する。

十六年と十七年には春先から、会員である小松田さん(現在の山中さん)の家から原野を借りて開拓し、畑作りをした。会員は三班に分かれて競い合ったりしたのである。

十八年の五月初めに、愛郷会の山に植林をして終わった後、役場前で